

同志社と民芸運動 (二)

西 郵 辰 三 郎

四

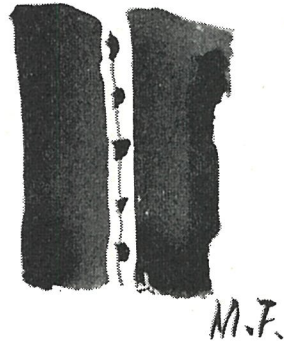
京都では、同志社を拠点とする柳先生と、五条坂を拠点とする河井先生の物心両面の結合はいよいよ深くなり、浜田先生はじめ、文学の寿岳文章、哲学の村岡景夫、医博の吉田璋也、式場隆三郎諸先生の往来も頻繁となって民芸界は急に賑やかになってきた。河井創作陶器展覧会には、新しい様式としての花瓶、角皿、湯呑、紅茶碗等、主として日常生活に深く関わる物が出品された。「用美相即」「物心一如」とでもいうべきか。諸作品の形は逞しさを増し、自由奔放にして、とくにその釉薬はみずみずしく楽しいものであった。また、いずれの作品も無銘になっていた

ことについて、人々はそこに新しい河井寛次郎先生の誕生を見たのである。すでに民芸に對しては大毎本山社長をはじめ、岩井京都支局長、黒板勝美、内藤湖南博士らの心からなる後援があったが、柳、河井、浜田先生らによつて全国的に蒐集された民芸品の展覧会が昭和四年全国に魁けて、京都大毎会館において開催されたことは、特筆に値すると思う。その頃、長い海外生活から帰国された湯浅八郎博士らも、この展覧会を見られて民芸の美しさに打たれ、本当の日本の姿はここにあってと喜び合い、島津の鈴木庸輔、京大の中村直勝氏らとともに京都民芸同好会を作り時には大丸などで、会員蒐集による展覧会などを開催された。そんな時、京都におられた柳、

河井両先生は、いつもよい相談役となり、後援者となつて民芸運動の推進力となられたのである。北野の朝市、壇王さん、東寺の弘法さんの朝市や縁日から、美しい下手物の数々が発見されたのもこのころであろう。柳先生の当時の言葉によれば、「宝の山に入るがごとし」というほどのものであった。これは京都の地元のことであるが、柳、河井、浜田先生らは毎冬必ず正月の休暇を利用して、全国的に、こうした宝探しに出かけられたそうである。

五

能勢「話をまた少しもとにもとすことにしよう。それは大正十一年ごろだったかな、僕



が同志社の法学部で、ドイツ語をやっているクラスに青田五郎君がいました。何で僕が青田と親しくなったか、はじめの頃はよく分らないが、とにかく何かおもしろい男でしたね。あの当時、同志社中学の先生——何といたったかな。背のあまり高くなく、細いが気骨のある先生達とマンガなどをしきりに書いていました。何かの用事で僕がその青田の下宿先、同志社聖山寮に行ってみると、突如として青田が、自分はこれから織物をやってみたい、と僕に言うのですね。僕はびっくりしてそんなことをやって生活ができるのか、と言いました。しかし彼は真剣で、何でも今の本部にいたる大江直吉君のお母さんが丹波の黒田村に住んでいたので、習いに行くというのです。夏休みでしたか……。帰ってくる、それがし織物を織って来ましたヨ」

西郷「それは青田さんが柳さんを知る前ですか」

能勢「もちろん、前です。それから半年ほどしてから、柳さんが来られたのかな」

黒田「青田が柳さんを知るようになったのは河井さんからだよ。ある日、河井さんの展覧会を高島屋に見に行った青田が、すっかり河井さんに感心したんだね。何でも鉢だったか皿だったか、それが五円かなんかの札がついていたんだが、青田はそれが欲しくてたまらない。そのころ同志社の先生では、いっぺんに五円は無理なわけさ。そこで欲しさの余り分割払でいいか、と高島屋の店員にたずねたというんだな。そりゃ河井さんに惚れた金持は、どんどん買えても、青田としてみりゃ、そうはいかないからね。ところがだ、河井さんがそれを耳にして、それはおもしろい、そういう青年には是非会ってみたいものだ、といって会われたのが、青田なんだな。」

西郷「それはなかなかおもしろい話ですね。実に河井さんらしい。」

黒田「それから河井さんと青田の交際がはじまるわけで、僕が河井さんのところへ行ったときは、河井さんから青田を紹介された。」

能勢「青田は、同志社中学の先生になってからも、次から次へショールのような、敷物のようなものを織っては見せてくれたね」

黒田「青田はその後、柳のみっちゃん（宗理さんのこと）の家庭教師になっていたのだから、自然柳さんからいろいろ教わったと思うんだ。僕だって暇があると神楽丘へ行ってワイ

ワイ言っていたんだ。河井さんなんか、美しいものにありつくと、いかにも、いかにもと言っては驚き、よろこび、時には泣いたりして、まあ大変だったな。僕らの中では、河井さんがいちばん金持で、柳さんの家から帰り道、熊野神社あたりのオデン屋で青田や僕はよくご馳走になったものだ。」

能勢「そうだ、あの頃は賑やかだったね。柳さんはまず物を見た人なんだが、同時に民芸品の生産と販売の集団を組織しなければならぬと言うことを、しきりに言っていましたね。あれは、イギリスのウィリアム・モリスからのヒントだと思えますが……」

西郷「私は、川瀬書店刊行の『モリス百年記念論集』を愛読しましたが、モリスはよろこびのない労働を嫌いましたね。都市には田園の美しさを、田園には都市の知と活気が欲しいと言ったモリスの言葉や、ギルドソーシヤリズムのことを今でも思い出します。」

能勢「そう、あのギルドですよ。そのことは中島重さんもよく言っていましたよ。僕らもよく分りもしないのに、そんなことを論じ合ったりしたことがあります。柳さんも熱心に僕らに質問しましたね。我孫子にいた富本

さんは、モリスの家に行ったこともあるんだな。柳さんは、日本にこそ、そういう協団を作らねばならぬ、と言っていましたね。またモリスの考えはいいが、作った物はそれほど面白いものではないとも言っていました。」

能勢「あれはいつだったかな。気持ちのよい日でしたが、柳さんと黒田辰秋君と青田君それに僕ともう一人黒田巧？　かな、ちょっと忘れたがとにかく五人で、鷹ヶ峯の光悦寺辺りを散歩したね。景色がよくって、本当にいい環境でした。光悦寺の裏あたりも、ゴソゴソ歩きましたよ。大徳寺の上の方に、ブドウ園があったり、尼寺があったりして、ここに民芸館を立てたらいいなあとか、協団を作りたいなんて話し合いました。こんなことを語りながら上賀茂あたりまで歩いて行きました。」

黒田「上賀茂まで来ると腹が減ってしまつて……。ある店に『すぐき』が山のように積んであった。おかわりをして二杯ぐらい食つたですかね。柳さんは東京の友人に贈るとか言って、早速その向いの郵便局へ小包にして持ってゆかれたな。その郵便局は今もありません。それから一行がああ美しい小川に

沿って、楠の大木のあたりのところを南に折れると、西側にとある大きな家があって、そこに「貸屋札」がかかっていたんだ」

能勢「ずい分大きな家でしたね。おもしろいことに、その近所に僕の教えていた同志社大学の星野繁子さんが住んでいました。星野さんの家は古い賀茂の医者でしたが……。そこでその家を見せてもらうのなら星野さんに頼めばいいと思って、そのことを星野さんに話してみました。」

西邸「星野さんは私の予科の頃、大学三年でした。今の法学博士田辺繁子さんですね。あの頃たった一人の女子大学生でした。」

能勢「そう、その星野さんの世話でとにかくその家を見せてもらいました。三百坪余りもありましたかね。大きな土間があって、九つもの部屋がありました。かねて民芸協団のようなものを作りたいという柳さんの念願もあつたので、あれからどうしたかな、ちょっと細かいいきさつは忘れたが、とにかくその家を借りることになったのですよ。そうしてそこで、民芸の仕事をはじめることになったのです。」

黒田「それが上賀茂協団のはじめです。吉

田璋也氏の『たくみ』のはしりみたいなものだ。家が余りにも広いので、余分の部屋は同志社の神学生に貸したりしてね。メシはじゃがいも、おかずはシヤケやなすびに醬油をかけたたり、だから、学生は不服だった。あとは協団の同志が、月三十円のノルマをおさめる。そうして物を作ればこれを売るという仕組みでした。河井さんはずいぶん応援してくれましたよ。それは物心両面でね。あのとき僕が作った朝鮮式の棚を河井さんが四十円で買ってくれたんで、その金をもとにして、僕は転宅の荷をこしらえ、木材を積んだりして上賀茂まで運搬しました。僕が木工、青田が織物や染物、鈴木が帳簿から運営をいっさいやっていた。鈴木実は同志社中学の秀才だったが、青田が先輩でもあり、先生でもあったので、まあ番頭から丁稚役まで青田の助手役だった。」

西邸「上賀茂協団で作ったものほどに販売していたの。」

黒田「まあいろんな人から依頼をされたがいちばん印象に残っているのは、東京上野公園で、御大札記念博覧会があつた際、山本為三郎さんの後援で三國荘を建設し、その家具

調度を頼まれた時だ。焼物は河井、浜田、富本、それに全国からの雜器、木工漆器が僕で織物は青田五郎だった。」

西邸「日本民芸館の第一歩が三国荘だったことは僕も先輩から聞いて、大阪の三国へ見学に行ったことは覚えていきます。上賀茂協団とは、深い関係があったのですね。」

黒田「まあ、今から思うとずい分苦しいこともあったが、とにかく、民芸という名が何を意味しているのか世間が分らない時代に、民芸館だとか、民芸協会設立とかいって論じ合ったり、『たくみ』のはしりのような仕事をしたのだから、上賀茂は民芸運動の歴史に載っていいよ。」

西邸「その頃、僕は同志社大学で歌ったり京都コーラスのメンバーになっていたが京都コーラスのバッヂは、今から思うと黒田さんが作った実に美しいものでした。木製のボタンのような生地に螺鈿で、『合』という字がほりこまれていて、またその貝の色合が何ともいえないほどでした。あれは、京都コーラスの指導者をされた柳兼子夫人の注文だったでしょう。」

黒田「そうそう、そんなことがあったな

あ。もうずい分、昔の話になるが、やはり上賀茂協団時代だったかな。」

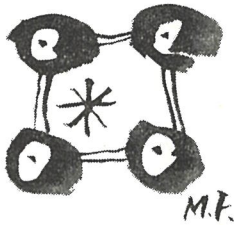
能勢「まあ柳夫妻が同志社において、とくに美の世界を通して、皆をレベルアップされた仕事は大きかったと思います。」

三人の歓談は、いつつきるとも知れなかったが、夜もかなり更けてきたので、またの機会をたのしみに、能勢邸を辞したのはもう十時を過ぎていた。

昭和七年、柳夫妻は、同志社や京都での大きな仕事を残して、東京へ帰られた。そこには更に日本のため、世界のための大きな仕事が残っていたのである。

(未完)

(香里中・高教諭)



クラーク記念館

今号から本誌の表紙は、中西進氏(商業高校嘱託講師)による、クラーク記念館の水彩画になった。

明治二十七年一月竣工をみた、クラーク記念館は、ニューヨークのクラーク夫妻が令息 Byron Stone Clark を記念して、同志社におくられた寄付金をもとに建てられたものである。同志社にある明治期建築物のうちでもとくに「蒼空にたかく、神を仰ぐ」その姿は、同志社のシンボルとして長く親しまれてきた。

設計者はドイツ人、ゼールとのみ明らかでないが、施工は京都の木工によるもので、当時としては珍らしい欧州風の建物であった。しかし地盤が沼地であったため、数回にわたる改修を必要とし、昭和三十八年には大規模な補強を行ない、現在にいたっている。

階上の礼拝堂は、教室として使われてきたが、将来は、復元されることになっている。

岡山における初期基督教の歩み

— 関連資料をみて —

星野三雄

京都寺町今出川上ル五丁目鶴山町の伊達達

吉、小宰両兄姉（京北教会員）が家族のかた

がたに迎えられて、上京されたのは昭和四十

二年の新春間もなくで、それまで健康の勝れ

なかった小宰姉は同年四月十九日に八十余歳

で昇天、残された達吉兄も四十四年十月六日

の夜眠るようにして九十三歳の生涯をおえら

れた。昭和のはじめ頃京都での学生時代から

の交わりで、その密葬と葬儀を司らして頂い

たが、そのあと、長男の達兄より「父の遺品

の中から面白いものをみつけた」といっ

て示されたのが、これから記そうとしている

岡山におけるペター宣教師の活動のひとこま

の資料である。

それは、

腹心之交
金蘭薄交
水魚之交

という交友住所目録（全部毛筆）と「蔽陽」

（非売品）蔽陽学院出版、という同学院の第

一回卒業生のための記念誌の二冊であった。

伊達達吉氏は広島県の甲奴郡上下町の生れ

であるが、早くから向学の志にもえて、古府

英学院に入学、更に二十七年十九歳で前記の

蔽陽学院に入学してこれを卒業、広島県の府

中の藤野医院の薬局に入ったのが、その世に

出た氏の生涯のはじめであった。

基督教大辞典をみると、Jewes, H. Petee

ペターの項には、「アメリカの海外伝道協会

宣教師、来日（明治十一年、一八七八）して

神戸、岡山などに伝道し、岡山英語学校、山陽英和女学校などを創立し、石井十次の岡山孤児院を援助した。」と記されている。しかし「金蘭簿」に出てくる古府英語学校や蔽陽学院の話はここには記されていないし、私立学校の歴史をみても岡山英語学校を別にしてこうした学校の名前は出てこない。しかし、「蔽陽」にはペター宣教師が大きな役割をもつていられたことが記され「金蘭簿」にクリスチャンネームの人が数人記されているところをみると、これらの資料は我々がみのがすことの出来ない資料ではないかと思われる。

一 金蘭簿

この裏表紙（全部和紙仮綴じ）には「広島県備後国甲奴郡上下町五百拾五番地伊達達吉拜各位、明治廿二年五月拾五日」とあり、名前の横には「Tatsuzchi Date とヘボン式ローマ字の署名がしてある。そして約二十一名の人々の名が記され、人によっては号、その他が加えられ、交友関係の註が加えられている。その第一書に出てくる人は

愛媛県伊与国越智郡今治村廿八番邸

辱 増田謙一

当時古府英和学校ニ寓ス

と記されている。この顯俊が号であるが、兄弟の故に姓が略されているのか、これだけでは明瞭ではない。またこの古府英和学校と岡山英語学校との關係がどんなものであったかは、更に現地での研究を待つより致しかたがないであろう。(京都を古都というように岡山を古府といったことがもしあったとすればこの問題は解決するのであるが)しかし興味のあるのは次の二名の名である。

① 延藤 次郎

名乗

重敏

洗礼名 ヨハネ

約翰

号

翠軒

② オネシポロ

平女柳熊太郎

この二人はクリスチャンネームがあり、兩名とも広島県で、前者は芦田郡府中村、後者は沼隈郡今津村の人である。このクリスチャンネームが、カトリックのものか、プロテスタントのものか、ここでは明白でないが、伊達氏が十数歳の折ことうした洗礼名を交友名簿の

中にかき加えていることは広島・岡山が、維新後の目まぐるしい改革の中で、新しい世界にのびようとする強い意向を明らかに示しているものと思つて差支えあるまい。そして、この名簿の巻末には、

男子立志出幽閑学若不成

死不帰ト吾食ニシテ古府英

語学校ヲ出然シ無他事欲天下

屈指已耳

と記されていて、当時の青少年の意気をあからさまに吐露している。

二 「薇陽」

この小書は、本文B C版(上下二段組)四十二頁と付録(学課程表)三頁よりなつていて、薇陽学院の写真(新島邸によく似たつくりである)が口絵についている、第一回卒業生のすばらしい送別誌である。そして、巻頭には「同志社教授大島正健先生」の卒業生への告辞の修正原稿が、約三頁にわたつて記されている。この第一回薇陽学院卒業式は、卒業生数僅か四人でしかも本科二名(前川啓太郎、寺島信夫)別科二名(湧川幹、荒木時二郎)という少ない人数であったが、大島教

授を京都から招くというような力強い卒業式であった。

又、在学生祝辞をよんだ在学生生徒総代の名には沢谷辰次郎が出ているが、彼は後にペテロ宣教師の秘書となり、ペテロ宣教師が東上した折は同行して東京に駐在、按手札をうけて、現在の代官山教会(前名城南教会)の初代牧師となった。彼が壮年時代に世を去つたことは惜しみて余りあるものがある。また英文の二頁にわたり「The chief Idea of Education」と題して Alice P Adams という宣教師の名がこの書にはあるが、どのようなか私の手もとでは分らない。兎に角、薇陽学院がどんな学校であったかは、私の愚弁を費す必要のない程、「薇陽」の三十五頁以下に記されているので、その要部だけをここに抜書きすることにする。

「本院設立始末

明治の初年以來基督教の我邦に伝播せるや信徒間布教に熱心すると共に教育を重んずるの念夙に盛んに起れり、加ふるに先設に係るべきものありたるより、頓に教会内外人士の注意を愈起し教育を重んずるの念倍々加はり、

従て学校の起るもの陸続として絶えず都会の地にして苟も教会のある所、基督教主義男女学校或は夜学会等の設けあらざるは殆ど之れなきに至れり、明治十、四五年の頃より十二、三年の頃に至る七、八年間は実に基督教主義学校興起の時期にてありしなり。

大勢既に斯くの如くなれば、布教著しき岡山に於て、夙に男女学校の信徒有志間に設立せらるるもの固より常数のみ、左れば明治十二、三年の頃岡山英語学会なるもの、我党の手に設立せられぬ。されど時運未だ到らず、校規の更に見るべきものなくして五、六カ年を経過せり。而して明治十八年の頃、基督教徒中国青年会なるもの設立せられしが、会運日に隆盛に赴くや、事業を求むる事切にして、彼の岡山英語学会を譲り受け、青年会英語学校と改称し、教授は専ら当時在留の宣教師ケレー、ペター（ペター氏は今尚在留す）の兩氏に委嘱し、便宣晝夜一、二時間宛、英語を教授し居りしが、当時条約改正談切りに起り、英語の流行するにつれ、本校の如き一時は八、九十名の生徒を得るに至れり、学校とはいへ其実純然たる英語会に過ぎずして、此の盛況を見る。当時誰か学校卒業の困難なる事に思

い及ぶものあらんや。斯くて明治二十二年初夏、女学校新築事業も、粗は終末を告げしを以て、時機熟せりとなし、男子普通学校設立の議起り、是に於て岡山教会員小野田元（此頃伊之吉と称す）氏、主として信徒有志者間に奔走の勞を執られ、二、三の相談会の末、其議遂に纏まり、岡山教会牧師安部磯雄氏及小野田元氏へ教則編出及教師招聘の件を一任せらる。而して兩氏の幹施により、同年九月、東中山下会堂の南隣に於て、岡山英語学校の開設を見るに至れり、設立者には丸毛真広氏を、校長には安部磯雄氏を推し、故平子貞誠児嶋龜士、霜山巖爾、ペター、ローランドの五氏を、教師に招聘し、會計の任務を中堀直秋氏に委託し、小野田元氏幹事の任を勤めらる。当時入学応募者五、六十名ありしも、試験嚴重にして僅かに其半数の者をして、入学するを得せしむ。要之岡山英語学会は一転して青年英語学校となり、再転して岡山英語学校となりしもの如し。されど、其再転するや組織全く前二者と異にして、純然たる普通学校となりたるものなれば、本院の紀元実此期に求むべし、設立の始末概略此の如し。そして、この後第一回卒業を出すまでの五

年間の経営の苦心（ペター宣教師は苦境を乗りこえるため非常な努力をした）と人事の移動とをたんねんに約二頁にわたって記している。そうした人事移動の中にローランド、ホワイト、アダムス嬢などの名があることを忘れてはならない。これを以てすると、岡山英語学校はその前身と後身をもつことになるわけで、此点、今まで、岡山英語学校の設立者ペターという単純な理解は幾分訂正修正されなければならぬと思われる。尚、被陽学院の学則の中には、

一、目的 本院ハ高等小学科ニ連接シテ高等普通学科ヲ授ケ直チニ実業ニ従事セント欲スル者若クハ尚ホ進ンデ高等專門ノ学校ニ入学セント欲スル者ニ必須ナル教育ヲナス

一、特色、本院ハ普通教育ニ於テ英漢數ノ三学科ヲ最モ重要ト認メテ之ニ最モ多クノ時間ヲ配当ス殊ニ英学科ニ至リテハ堪能ナル外国教師三名ヲ有セハ其進歩頗ル著シ是レ本院入学者獨特ノ便宜ト云フ可シ

とあって、その目的は生活にいち早く入り得前進しうる力を養うことであつたらしい。

高等小学卒業生は無試験、その他のものは、漢学（国史略講読）、数学（四則等）、作文（書牘文）を試験される。本科に入ろうとするものは、一段高い程度の試験を課せられる。

学科については、予備科、一々三学科と二カ年の高等科があり、予備科では聖書講義、日本外史、十八史略講読、英語の発音法読方会話実習、訳読でナシヨナルリーダーの一四巻、数学では算術、幾何代数の初歩、地理、歴史が課せられる。一年になると、訳読、数学の程度が高くなり、ナシヨナル第五読本、ユニオン第四読本やスマス大代教書とシヨピネー



微陽学院第一回卒業生送別誌

「微陽」明治27年8月30日発行

代議政体などが課せられる。卒業生の荒木時二郎は答辞の中で「文明果して仏国に伝はりしか、英国に伝はりしか、英国のクロムウェル騒動は、米州の独立義戦は、はては仏国大革命大破裂は、などと寂寥窮冬の如き脳漿を絞り来る、或はアレキサンダー、ナポレオン、シーザー、ハンニバル等の猛將を捕へ来りて翻弄一番し、或はカルビン、ルーテル、ウォルシー、ノックス等を上下して、宗教紛乱の跡を尋ぬ、若し夫れ、文学

幾何書、カッケンボスの米国史、二年ではドイツケンズの英国史又はゲーキの地文学スウィントンの万国史、三年ではトドハンターの三角術、ギゾーの文明史、ウォーカーの経済史ゲージの物理書、レムゼンの化学書などが課せられる。現在の高校二、三年生に比して、その程度は隔段の差があるといわなければならない。高等科では、アービングの小品集、マコーレーの諸論文、カーライルの論文、エマソン論、ミルトン、セーキスピールの詩文、スペンサーの社会学、第一原理ブルンチュリーの国家学、サルターの心理学、ミルの

の範囲に入りては更らに聴くべきものあり、スペンサー、チャーサー時代より降りてピクトリア時代の終局に到り、尚ほ米州の文豪アービング、エマソン、ロンクフェロー、ホイッチャー等を混し来る、沙翁言へり、ミルトン語れり、ジョンソンは、ポープはなどと引照し来ること雨の如く又霰の如し、云々」とのべている。今日でこそこうした人々の名前にはよく知られているが、明治二十七年頃の人々にはおどろくに足ることであったにちがいない。しかし、彼も当時の人であって、長い文章の終りを、「徒らに冗長にして意を失す、重ねて旭莊廉熟を去るの詩を仮り来りて一誦せん。曰く、贈虚之来無別語莫教歲月等間過」とむすんでいる。

この微陽学院がどれ程つづいたかは知らない。伊達達吉氏の入学はこの第一回卒業生のおと（明治二十七年）で、卒業までの五年間はたしかにそのままであったと思われる。詳細が求められればなお興味のある事項が現れてくるであろう。

終りに、この「微陽」の印刷所が、岡山孤児院活版部となっているのも興味がある。

（昭和五年神学部卒・桜美林大学）

静岡県下の同志社人



静岡同志社クラブ

静岡といえば、誰でもが「暖かくて、本当に良い所にお住いですね」というにちがいない。その名の通り静岡は遠く登呂の時代から安倍の市として栄え、家康によって現在の街の発展を見るにいたり、四十万の人口を要して隣の清水市と共に躍進しつつある。特に最近開通した東名高速道路は、今後、ますます静岡の発展を約束してくれる。しかし、静岡は文化的、また経済的にみると地理的条件からいって、何といても東京の影響が強く、ほとんど関西方面の影響は受けていない。したがって大学への進学状態も、ほとんど東京方面の大学へ進む者が多い。一例をあげるならば県下でも最も高い進学率を誇る県立静岡

静岡高校進学状況

	1955年	1968年	1969年
東京	16	12	—
京都	4	24	15
北海道	4	7	11
東北	9	31	16
静岡	63	58	42
早稲田	41	79	49
慶応	13	39	38
明治	15	34	30
中央	17	16	31
立命館	13	18	12
同志社	0	9	18
同志社	6	23	19

（「静岡高校進学資料」
および「静岡新聞」42号より転載）

高校でも別表のような状態で、近年やっと同志社の名が聞けるようになり、静岡高校の前身である旧制静岡中学の頃は、同志社への進学は年に一人か二人、あるいは皆無というありさまであった。したがって戦争前の地元出身の同志社マンは少なく、わずか数名を数えるのみである。東京の一流私学のOB会に年配者が揃っているのをみるとちょっと淋しく思われるが、最近では同志社の名前が静岡でも聞かれるようになり現在静岡、清水を中心として集まっているが、静岡同志社クラブで

も会員一五〇名を数えている。若さの静岡同志社クラブといえようか。今後もしどし同志社に進学する若人が静岡から出ることを念願してやまない。

*

静岡同志社クラブの創設は戦後である。昭和二十年六月二十日未明、B 29 一〇機の来襲によって焦土と化した静岡市の焼跡に同志社クラブの看板が上ったのは、まだ復興も軌道にのっていなかった昭和二十二年である。信州の疎開先で軍需工場を経営していた海野堅三郎は郷里静岡に帰ってくるや、静岡市人宿町に「オーク商会」を設立したが、浜松の田島氏の呼びかけに応じてその店に「静岡同志社クラブ」の看板を上げた。そこへとび込んできたのが、これまた終戦後、ソ連軍に捕えられ捕虜生活後、静岡一番町教会の復興に静岡へ引揚げてきた牧師渡辺晋である。しよせん、二人や三人ではクラブとはいえない。それ以来渡辺は市内を折をみては一軒一軒訪ね歩き、ようやくまとまってクラブらしくなり、その結成をみたのが昭和二十四年である。

当時のメンバーは会長渡辺晋を中心として副会長中島信幸、会計市川勝郎、幹事に山田徹之、西村章、海野堅三郎、友広勝、多賀育子、尾崎美津子、等々で全員で三十名位なのであったであろう。とにかくここに静岡同志社クラブは発足した。当時の会費は年一〇〇円、毎年二、三回位は全員で会合し、楽しい家庭的な会であった。話題はもっぱら「どこそこ」に靴下が沢山あるが誰か欲しい者はいないか」とか、「どこかにいけば食糧の買出しが容易だ」とか、とにかく戦後の物資がない時のことゆえヤミの話がしばしば出たのも今は笑い話である。

ようやくクラブの活動も活発となった頃、当時学生であった塚本将夫、中山秀男、鈴木敏夫等が中心となって静岡に同志社大学グリークラブを呼ぼうという話を持ち上ったのが昭和二十八年である。静岡同志社クラブが主催で、学生側の同志社駿河クラブが協力という形で行なわれることになったが、塚本、中山等学生は、この演奏会が同志社も良く知らぬ静岡で、しかも初めての試みとあって実際のところ成功するものかどうか、莫大な赤字を出すのではないかと心配したが、赤字が出

てもその負担能力がない学生のことゆえ、有力OBのところへ「赤字が出た時はぜひよろしく尻ぬぐいをお願いしたい」と必死の願いをこめてまわった。一方OBの方も母校のためなら「よしまかせておけ」ところよく応諾し、ここに校友・学生が一致協力して開催されることとなった。両者とも、静岡、清水はもとより藤枝、焼津、島田、さらには沼津の校友にも呼びかけて、一軒一軒会員の家をまわってはキップの前売を依頼し、その販売に努力した。学生達は静岡の繁華街に机とポスターを並べて通りかかる人達にも来場をお願いし、宣伝に努めたのである。この頃はまだ同志社の名も知らぬ市民が多く、「ドウシヤです」といっても「何の会社ですか？」といわれたのも笑えない実話である。ともかくキップはさばいたものの、いったい客がきてくれるものかどうか蓋をあけてみるまで心配であった。

しかし翌二、〇〇〇人収容の静岡市公会堂に幕をあけてみれば立錐の余地もない満員で、なじみの薄い男声コーラスではあったが、美しいハーモニーとステージマナーの清潔さで、素晴らしい印象を静岡市民にあたえ

た。終演後、会場前の広場で校友・学生が一緒になってポピュラーソングやカレッジソングを大合唱し、同志社チェアーで結んだことは市民の絶讃を拍し、校友・学生とも涙を流して感激、さらにアルコールが入ったOBは夜の繁華街を学生と肩を組みあつてカレッジソングを合唱して歩いたのもこの時である。このグリークラブ演奏会が同志社を静岡に印象づける道を開き、以来毎年夏休みには同志社の音楽会が開かれ、市民は同志社の音楽会を待ち望むようになった。

昭和三十四年、十年の長きにわたつてクラブを育成された渡辺晋が会長を引退し、最高顧問となり、中島信幸が二代目会長に推薦された。中島は同志社ファミリーということをし、強調し、家族ぐるみの会をモットーに、またこの頃から若いOBも年々増加し一〇〇名を越えるようになったので、大学を出たばかりの若手の多くに幹事を依頼、各種の行事を催すようになった。この時の催しが家族バス旅行とクリスマス家族パーティーで、第一回のバス旅行は初夏の伊豆長岡温泉に遊び、年末に行なわれたクリスマス・パーティーは中島屋ホテルのホールを借り切つて、一〇〇名余

りの人々が参加、キャンドルサービスに続く余興や福引、プレゼント交換に楽しい一夜を過ごした。これらは恒例となつてクラブ員とその家族、友人のあいだでは楽しみの一つとなつてゐる。

その他、大塚前総長、住谷現総長の来静を仰いだり、今西、竹林両教授の経済講演会開催、法律研究会の無料法律相談所の開設協力等々、静岡同志社クラブは年々盛大になつていった。その後、中島の東京転居にともない三代目の会長に推されたのが、現会長の西村章である。西村も中島の後を受けて、家族中心にとさらに会の発展を願ひ、会の事業費捻出の一助として開いたのがダンスパーティーである。第一回は、山本恭典、野崎峻、友広美津子等が実行委員となり、昭和四十二年の秋に市産業会館ホールで開かれ、その成功に氣をよくして昭和四十三年秋には五、〇〇〇人収容できる市の体育館、駿府会館に一、〇〇〇余の参加者を集めて大成功をおさめた。また初夏にはバス旅行を兼ねて静岡の久能の浜に大きな天幕を張り、会員、家族七〇余名がしらす網を借り切つて、全員で汗を流しながら大きな地引網を引き、楽しい一日をすこ

した。浜でとれたばかりのピチピチとはねまわる透明な生しらすを酢味噌で食べる味はまた格別で、特に他の土地では味わえぬうまさである。また、子供達はしらす網に入った生きた小魚をバケツに入れて家に持ちかへつたりした。若い人達のためにボーリング大会を開き、十レーンを借り切つて三〇余名の参加を得、老いも若きも汗を流した楽しい一日であつた。

現在、静岡の会員は一五〇余名を数え、毎年同志社の音楽会を催しているが、特にわれわれの希望したい事柄は常に学生としての身分をわきまえ、謙虚な気持と清潔な態度で来静して欲しいということである。毎年、好評な音楽会ではあるが、近來、時代の風潮とはいえ、数年前來静した某部のマネージャーなどはあたかもプロのごとくにふるまい、その打算的、職業的態度は静岡OBの大きな怒りをかい、さらには、クラブやキャバレーのアルバイトの幹事を依頼し校友が好意で紹介すれば、出演料がどうの、出演回数が多すぎるのと、どう考えてもプロ楽団としかみられないことがありひんしゅくをかつた。このようなことは同志社大学を名乗つてくる以上静岡

に悪評を招くものであって、われわれ在静校友の許すことのできない態度である。われわれは全国演奏旅行に回られる学生諸君に望みたい。諸君が学生としてふさわしい清潔な態度で来静されることを。

*

次に校友個々の紹介に移ろう。初代会長、現在クラブの最高顧問である渡辺晋(昭6神)は一番禺教会の牧師として宗教界にあり、また日本キリスト者平和の会副委員長、静岡県宗教者平和協議会理事長、日本野鳥の会静岡支部幹事長と、保守的な静岡という地域にあって宗教界のみならず、平和運動、社会運動に活躍している。その妻慶子(昭4女専)も教会付属の保育園長として奉仕、また同窓会静岡支部長を依囑されている。二代目会長中島信幸(昭7法)はその特異なセールスで有名なポーラ化粧品を重役をされ、静岡実業界の雄であったが、東京方面に転居され、現在名誉会長に推されて、時折クラブ員が首信をかかわしている。

昭和四、五年頃、同志社大学学生新聞が創立された頃のメンバーだった現会長の西村章

(昭5文)は地元唯一の新聞である静岡新聞の編集局長。学生時代、ボートと陸上で鍛えた体にものをいわせ、徹夜ものともせず頑張っており、またその温厚な人柄は会員全体からしたわれている。静岡新聞社には西村の長男陸志(昭40文)をはじめとして数名の同志社マンが第一線をとびまわっている。高商時代、学生幹事に推され、神棚事件の渦中において、「自由を守れ」と闘ったのが副会長海野堅三郎(昭12高商・旧姓鈴木)である。現在海野金物工業社長として静岡実業界にその人ありといわれ、また静岡金属工業会長、ロータリークラブ、静岡葵ライオンズクラブ第一副会長等々、十指にあまる公職をかね、剣道で鍛えた五尺八寸の体格にものをいわせて活躍。また海野は高商時代、学生の尊敬の的であった鷲尾校長の陶像を、学生達の浄財で時の名工、沢田宗山師に依頼して作ったというが、それが今見あたらぬことを心配している。今一人の副会長尾崎美津子(昭3女専)は社会教育、特にガールスカウトの指導者として奉仕している。その他文化、教育方面からみれば教育界には長年静岡高校の英語教師を今は引退している多賀育子(昭4女

専)、山角幸子(昭6女専)、池谷和三(昭33文)以下数名。特に今の三十代の静岡高出身者は多賀に英語でかなりしほられているはず。音楽の方面では野崎峻(昭19中)に臼田まり子(昭22女高)、野崎は農林省へ勤めるかたわら静岡合唱界をリードし、また山岳界にも顔が広い。臼田はその門下生も非常に多く、毎年開かれる発表会は盛況である。学界では東海大学教授成宮嘉造(昭13法)が唯一の存在、熱血漢である。塚本将夫(昭30文)は天理教教会を主宰。実業界では多くの同志社マンが活躍、清話会を静岡で主催している山田徹之(昭4文)はクラブの大久保彦左エ門的存在。航空部のパイロット、平和倉庫の友広勝(昭19経)は、静岡の家具業者と運送業者の共同出資で作られ、全国最初の試みとして各方面から注目されている静岡家具輸送センターの理事。友広の妻美津子(昭19高女)はA I U代理店を経営、友広美津子と共に会計をしている吉川美美枝(昭35女大)はクラブの財布をガッチリ握っている。

野田合板の野田正男(昭18高商)も静岡実業界の中堅だろう。青年会議所のメンバーには皮革卸裕豊商会の石川誠一郎(昭31商)、

県下第一の下水道設備工事を誇る池田工務店の池田敬一（昭32文）、名古屋から来て一躍静岡の広告ではナンバー1になった三晃社支社長の大塚俊夫（昭32法）、静岡食糧工業所他二、三の会社を経営する山口進（昭36経）がいる。池田の夫人智子（昭32文）や大塚の片腕となって三晃社を背負っている栗林治雄（昭35経）も同志社マン。全国に静岡特産の下駄、サンダルを卸しているのが老舗三島屋の柿田豊之（昭19経）、辰次（昭23経）の兄弟、焼津港の名産、鯉節の販売で有名な山政の山口政市郎（昭30経）も各所に支店を出して張り切っている。

家具の装飾品として新しいプラスチック製品を開発して家具の装飾に革命をもたらしたヤブノ商会の藪野智士（昭30経）。実業界で活躍する若手校友はかなりの数にのぼっている。また、意外に一般消費者に知られていない静岡の特産に鏡台がある。静岡は他のサイドボード等の木製品を含めて約一七〇億の生産をあげているが静岡の鏡台は全国市場の六割をしめている。その鏡台卸商としてとびまわっている中に、航空部で二年連続全国優勝した岩ヶ谷精一（昭34商）、山岳部でならした

土屋国男（昭34経・三喜屋）、村上淑人（昭40経・村上愿商商店）、花村正夫（昭44商・花村清一商店・日本家具工業）の四人がいる。なお岩ヶ谷は土屋の義弟。村上の姉、松崎圭子（昭34女大）村上暢子（昭38女大・中学教員）も同志社で同志社ブラザーズであり、同志社シスターズである。またこの他同志社ブラザーズは天石晴朗（昭34法・静岡スバル営業所長）、峯郎（昭35商・東海パルプ）、山崎工業の山崎純男（昭37商）舜平（昭40工）。

同志社カップルは米川電器の米川精人（昭35工）、与理（昭35文）がいる。静岡でも数少ない公認会計士の市川勝郎（昭2高商）は会の長老として若い幹事に貴重な助言をあたえてくれる。昭和三十年前後に体育会の山岳部メンバーに静岡清水出身者が揃ったことがあった。池上和男（昭30工・金物商）、杉本和哉（昭32商・クリーニング業）、栗田岩夫（昭34商・小糸電機）、土屋国男・鈴木康司（昭36文・貸車庫業）、さらには部員ではないが毎日部屋へきていたク部友々西郷和史（昭32商・化粧品商）、今井久（昭34商・青木運送）等であり、一時は山岳部では静岡弁がはばを

きかせたものである。清水港で毎日外国船長とわたりあっている青木運送の今井の下にも数名の同志社マンが活躍している。シキマ製パンの所長加藤勲（昭29経）と羽根田勝弘（昭42法）、早川好則（昭43商）が名古屋から新たに静岡に販売拡張にとフアイトを燃やしてやってきた。金融筋では、静岡銀行に高柳寿男（昭34経）以下数名、その他清水銀行の夏目一男（昭31経）、静岡信用の山梨典彦（昭33商）等が活躍中。

とにかく全員もろさず書くのは大変だが最後に紹介しておかねばならないのが、県下で最もうまい生ビールを飲ませる、ニューキルクの主人山本恭典（昭20中）である。山本は現在クラブの幹事長であり、実質的活動の中心となっている。山本のビール談義は、この生ビールの美味さとカウンターに座る美人の奥さんとともに静岡の名物で、自称、静岡の文化人のたまり場となっている。ここは同志社クラブの事務所もかねているので、静岡を訪ねられる校友があつたら、ニューキルクに寄って下されば静岡の状況及び連絡はわかるようになっていく。

（昭三四商卒・土屋国男）